

tera

イラスト 山椒魚

# グローイング・スキル オンライン 2

Growing Skill  
Online 2

「試し読み版」

ツギクル  
ボックス

# 主な登場人物

## ブリアン

テンバータウンや第一拠点の農作物を1人で支える農業プレイヤー。極度のあがり症。

## アルジャーノ

光属性の魔法使い。常に無表情で、何を考えているのか分かりにくい。

## 十六夜

フクロウのティムモンスターを持つ、コミュ障で寂しがり屋の狩人。みんなが認める美人。

## ローレント

友人に誘われてGSOを始めた初心者ゲーマーの主人公。10年間海外で武者修行をしていた武術の達人。

## ツクヨイ

自ら「ぶらっくぶれいやあ」と称する中二病を患った間属性魔法使い。

### エリアル

風属性の魔法使い。せっかちな性格で、トラブルを起こしやすい。

### 一閃天

ケンドリックに雇われたリアル中国拳法八極拳の達人。プライドが高く、自分が認めた者以外は見下したような態度をとる。

### トモガラ

GSOのサービス開始当初からトッププレイヤーとして最前線をつっ走る、主人公の友人。豪快な性格だが、戦いにおいては慎重な面も。戦士職と樵夫を選択。

### 十八豪

トモガラとローレントの共通の知り合いである廃人プレイヤー。中国拳法の使い手で、中国名は豪

### 三下

難易度の高いプレイヤースキル「カウンター」を得意とする天才。戦士職だが、モデル並みの体形が特徴。

## 1章 初めてのデスペナルティ

「——ゴギヤアアア!!」

俺よりもはるかに大きな体躯を持った霊長類の突進。大剣を盾になんとか堪える。

「ぐううッ」

思わず声が漏れた。絶賛大ピンチだ。

最近新たに開放された南方の森の奥にそびえる山エリアへと、狩りの拠点を変更した矢先のこと。ファイトモンキーという弱い小さな猿の魔物が犇めくただの猿山かと思っていたら、奥からとんでもない大物が姿を現しやがった。

### 【バトルゴリラ】Lv 30

ファイトモンキーがクラスチェンジした存在。歴戦の大猿。出現条件が特殊で、普通のバトルゴリラとは一線を画す強さを持つ。ユニーク指定モンスター。

「ユニーク指定モンスター？ いったい何なんだ！ ローヴォー！」

茂みの中に身を潜ませている相棒の名前を呼ぶ。

「——グオンツツ！」

俺の声に合わせて、1匹の灰色狼が唸り声を上げて奥の茂みから飛び出すと、バトルゴリラの背中に牙を突き立てた。

「ゴギヤアアアツツ!!」

だがバトルゴリラは咆哮ほうこうをあげながら身を震わせ、背中のローヴォを簡単に弾き飛ばす。ローヴォもレベル10を超えクラスチェンジし、もういっぱいしの灰色狼だということになって奴だ。

俺はローヴォの奇襲によってできた一瞬の隙をつき体勢を立て直すと、山を歩く杖代わりに使っていた六尺棒を両手に構え、敵の喉元に向かって捻ひねりを加えながら突き込んだ。

「デヤアアアツツ！」

手応えは、なし。なんと寸前で六尺棒の先を掴つかみ止められていた。

「ゴギヤアアアツツ！」

「くっ、ブースト！ メディテーション・ナート！ エンチャント・ナート」

すぐに六尺棒を手放し、バトルゴリラの拳をバク転かして躲かわすと、身体強化スキルに加え、いっただか無属性魔法使いに転職してから取得した補正用のスキルを自分にかける。

かいつまんで説明すると、【メディテーション・ナート】は、魔法防御力と魔法攻撃力を微

上昇させるパーティーバフスキル。そして【エンチャント・ナート】は、武器に魔法攻撃力を付加する個人バフスキル。同時使用することで攻撃力の底上げが可能だ。

さらにステイブンから貰い受けた【魔槌の六尺棒】は、持ち手の魔力に応じて攻撃力や耐久度に変化する、棒のくせして今一番攻撃力を持っている武器なのだ。

「アポート！」

バトルゴリラが興味を失って投げ捨てた六尺棒を手元に引き寄せると、山の傾斜を利用して身を低く構え、避けづらい下からの突き上げを見舞う。

「ゴギヤアツ！」

「くっ、やはり通用しないか」

獣特有のとんでもない反応速度でギリギリ避けられてしまった。今の俺のレベルは20、その差は10、勝負にならないのは然さもありなんと言ったところだろう。

さて、どうするか……？

触り程度の対峙をしてみても、圧倒的に不利だということが分かる。耐久力も俊敏性も、北の森のエリアポスであるスターブグリズリーとは大きく違っていた。ユニーク指定モンスターと書かれているし、それも当然なのだろうか。

「逃げるか……？」

このままではローヴォも俺も簡単に殺されてしまう。くそ、判断を見誤った。もう少し警戒しながら山を登ればよかつたんだ。でもまさか、ファイトモンキーを狩り続けると、バトルゴリラを呼ばれるなんて普通思わないよな。

「小猿どもを蹴散らしながら先行しろ、山を下るぞ——」

ローヴォにそう指示を出し、俺もバトルゴリラから背を向けて逃げようと走り出した時——突如として目の前に巨大な岩が降ってきた。

「ギャオオアッ」

振り返ると、声を上げながらドラミングするバトルゴリラがいる。どうやらこの恐ろしく好戦的な霊長類は、俺たちを大人しく逃がすつもりは毛頭ないらしい。

「戦うしかないか……」

現状、一番の攻撃力を持っている武器で対抗しても、届く前に止められてしまう。そして体力的にも何度も打ち合っつけられるほど、この相手は甘くないだろう。故に、狙いは一撃。どぎついのを一発、決めてやる。

「ゴギヤアッ！」

バトルゴリラは激しく地面を鳴らしながら傾斜を駆け下りて肉薄し、真っ向から叩き潰すように両拳を振り下ろした。六尺棒で慎重に間合いを測り、後ろに一步分引くことで紙一重で攻

撃を躲す。

「はッッ!!」

声を張り上げ全身に力を入れると、ゴツイ右の側頭部に六尺棒を思いつきり叩きつけた。

「……………ハハッ」

乾いた笑いが漏れる。まるで効いちゃいない。バトルゴリラは打ち込まれ裂傷ができた箇所をポリポリと指先で搔いた後、右腕を無造作に振り払った。

——その瞬間、視界が大きくブレる。背中に激しい衝撃を感じて、ようやく自分がぶっ飛ばされ、その辺の樹に激しく叩きつけられた状況を理解した。

「ウォンッ!」

「だめだ、来るなァアッッ!」

俺の様子を感じ取り急いで引き返してきたローヴォを力の限り叫んで追い返す。

クソ、まともに一撃ももらったせいで体が動かない。腕や足の感覚から察するに、骨折の部位欠損ベナルティを受けているようだった。バトルゴリラは、戦えない者にはまるで興味が無いのか、駆け寄って来ていたローヴォを標的にしている。

「エナジー……………ボール……………」

折れた腕を動かして、唯一持っている遠距離用のスキルを詠唱する。手元から飛んでいく無

属性魔法の青い球体は、バトルゴリラの後頭部に当たって風船のように弾けた。毛ほどのダメージも与えてないだろうな。その証拠にHPバーは1ミリたりとも動いてない。

だが、おかげでバトルゴリラの意識が俺の方へ向き、その隙にローヴォは戦線離脱することに成功した。六尺棒を杖代わりに、折れない足に力を入れて立ち上がり言ってる。

「……まだ、死んでないぞ……ッ!!」

俺の戦意はまだ尽きてない。殺してもいない相手に背を向けるとは、全くもってふざけたクソゴリラ野郎だ。六尺棒を構えてゴリラを待つ。

「……………」

だが、バトルゴリラはとどめを刺しに来なかった。どこまでも勝ち誇ったような顔をして右側頭部の裂傷に指で唾をつけると、そのまま山の奥へと姿を消してしまった。

殺す価値もないってことか？ ふざけたゴリラだ。今俺を生かしたことを次に会う時は後悔させてやりたい。そう思った時、俺の肩に何かがドサリと落ちてきた。

「ん?」

【チェインバイパー】Lv18

強力な出血毒を持つ蛇。毒で動けなくして丸呑みにする。



「……シャー……」

俺の腕くらいの太さと長さを持った蛇と目が合った。

舌をチロチロと出しながらゆっくりと顔に近づいてくる。これは不味いぞ。俺は今、こうして立って構えてるだけで精一杯。もう一歩たりとも動けな——。



気が付くと、ログイン地点としてステイバーンから間借りしている部屋のベッドだった。ロ  
ーヴォが心配そうに鳴きながら鼻先を顔に擦り付けてくる。

プレイヤーネーム…ローレント ※デスペナルティ中

職業…無属性魔法使いLv20

信用度…70

ステータスを確認すると、デスペナルティ中と書かれていた。確か、デスペナルティになるとHPとMP、さらに取得経験値やドロップアイテムの取得確率が10分の1になるようだ。プ

レイヤーキラーに殺された際は対策を取っていないと持っているアイテムを失う可能性があるのだが、装備しているアイテムは六尺棒も大剣も全て保持していた。

ただ、所持金が大きく目減りしている。プレイヤーキラーの3人を返り討ちにした際、賞金として獲得した分のお金をそこそこ持っていたはずなのだが……シヨックだ。

「そうだ、ローヴォ」

「ワオン？」

俺が死んだ場合、被害に遭っていないティムモンスターはどうなるのだろうか。こうして一緒にログイン地点に戻って来ているということは、一緒にデスペナルティか？

◇ティムモンスター

【ローヴォ】Lv18

種族…灰色狼

よかった。ローヴォにはデスペナルティの記載はない。どうやら、ティム主のプレイヤーが死ぬと、そのままログイン地点まで一緒に戻されるらしい。ほっと一息ついたのち、心の中にモヤモヤが溢れ出てきた。

クソゴリラめ、勝ち誇ったような顔をしゃがって。上に蛇がいたから自らとどめを刺す必要はないってことか。そういうのが一番腹立つよな。クソが。

「なんじゃ、出とつたんじゃなかったのか？」

相変わらず薄暗いリビングへと向かうと、1人用のソファに腰掛けたステイブンがパイプを燻らせながら寛いでいた。

「死に戻りました」

素直にそう告げると、ステイブンは眉を怪訝に動かす。

「お主が……か？ いったい何をしでかしたというんじゃ？」

しでかしたもなにも、ファイトモンキーを大量に狩っていたら、奥からバトルゴリラとかいうとんでもなく強い敵が姿を現した、ただそれだけである。

それを話すと、ステイブンは少しため息をつきながら、リビング隅の箱に丸めて乱雑に放り込まれている大きな紙をお得意の転移スキルで引き寄せて、テーブルの上に広げた。

「単騎で南の樹海から山の奥へと向かうならば、せめて2次転職を済ませる程度まで、自分のレベル上げに専念することじゃな。山の主相手なら尚更じゃ」

広げられた地図はテンバータウンから南の森、そしてその先の山に住まう魔物の分布を表していた。ところどころ違う魔物も載っていたが、だいたいファイトモンキー、バトルゴリラ、

コンバットエイプと、名前からして猿ばかり。リアル猿山だったみたいだ。

「悔しいです。手も足も出なかった……」

こちらの攻撃は全く効かず、バトルゴリラが無造作に手を払っただけで、俺は数十mの距離を吹っ飛ばされ、各所を骨折していた。

「やはり、魔法職での接近戦は限界があるのでしょうか……?」

「ふむ、スターブグリズリーを倒したお主でも、やはり限界はあるようじゃな」

俺の問いかけに、ステイブンは大きく煙を吐いて立ち上がった。

「それについて1つ、お主にスキルを授けようと思うとる」

「おお、修行ですか」

かつて、ステイブンが修行の地として使っていた荒野へは、もう随分と行ってない。弟子を放置する師匠とは、これいかに。スキルを授けると聞いて少しワクワクした。

「じゃが今度じゃ」

「ええ……今度?」

「うむ、わしはこれから所用があるで。まあ暇を見つけて声をかけるから待っとれ」

そう言っただけでステイブンは転移魔法でバツと姿を消してしまった。相変わらずいろいろと謎の多い師匠なこと。だが、こと魔法スキルにかけては俺の数段上に行く。そして修行の地へも

連れて行ってくれるし、なんだかんだ良き師匠だ。

「ワオン……」

「ん？ ああ、腹が減ってるのか」

ローヴォが餌皿を咥えて空腹を訴えてきたので、少し遅めの昼食をとることにした。朝から南の山で散々な目にあつたわけだし、今日のお昼は少し豪勢にしよう。

フレンドリストを確認すると、サイゼとミアンがログインしているようだったので、第1拠点に新しくできた彼女たちのお店にでも向かってみるとしようかね。



「あ、こんにちは！ ローレントさん！」

「あら、ローレントじゃない」

「どーも」

第1拠点に作られたサイゼとミアンの飲食店、通称『サイゼミアン』に顔を出すと、ちょうどテラス席でサイゼがレイラと一緒にお茶をしているところだった。

「なんだか機嫌が悪そうね？」

顔に出ているのだろうか。確かに、ステイブンに近々修行をすると言われたが、それで心のモヤモヤが晴れたわけではない。気晴らしにとドカ食いしに来たのだ。

「豚ステーキ10人前とローヴォに適当な食事を頼む」

「はあ〜い!」

ローヴォを散々もふもふした後、パタパタと厨房の方へ駆けて行くサイズを見送る。そのままくつろぐレイラに山で採ってきた薬草を買い取ってもらおう。

「レイラ、薬草の買い取りを頼む」

「いいわよー。っていうか朝から狩りしてたのね。本当ごくろうさま」

「明け方から南の山に足を伸ばしていた。まあ、死に戻ったんだけど」

森の方は人がたくさんいて、薬草の群生地も大きく減ってしまった。だが山はまだ人が少なく、群生地もそこその数を確保できるから魅力的だった。うるさい猿を蹴散らすと、とんでもない初見殺しをやってくるんだけどな。厄介な毒へびもいるし。

「……ん? 今さらって爆弾発言しなかった?」

「ええ、私も聞きました。ローレントさん、死に戻ったんですか?」

ローヴォの分のサンドイッチを大量に持って来たサイズもレイラと共に啞然として固まっていた。そんなに人がデスペナするのが珍しいのだろうか。

「ローレントってレベルいくつだっけ?」

「レベル? 20だけだ」

「かなり高いレベルだと思うんだけど、あんたでも勝てない魔物がいたの?」

「うむ、南の森は猿山みたいな感じだ」

狩りの成果をいろいろ見せてと言われたので、薬草以外にも、解体で得られたドロップアイテムをテーブルの上に並べていく。

【喧嘩猿の骨】 軽くて硬い猿の骨。さまざまな用途に使われる。

【喧嘩猿の皮】 ごわごわしているが、そこまで頑丈ではない。

【喧嘩猿の脳】 錬金素材。一応食材としても扱われるが、美味しくはない。

あまり使い所が分からない素材ばかりだった。骨は汎用性高いっぽいけど、皮はごわごわしていて頑丈じゃないって説明書きにある通りの代物。ちなみに脳は一応レアドロップ扱いらしく、ゴブリンを解体すると稀に手に入る錬金素材【小鬼の髑髏】と同じニュアンス。

「うわ、きもっ!」

瓶詰め of の脳みそを見たレイラの反応である。サイズは見ることもせず、ローヴォに熱心にサ

ンドイッチを与えてもふもふしていた。

「ファイトモンキーを乱獲すると、バトルゴリラが出現する。そいつに負けた」

くそっ、思い出すだけでも腹が立ってきた。戦いに敗れたこともそうだが、一番腹が立ったのはそのまま放って置かれたことだ。絶対いつか倒す、もう心に決めたぞ。

「ざっくりした説明だけど、なんとなく想像はついたわ。一定の敵モブを倒すと、そうやって強い敵が出現するってことは、ゲームではよくあることだもの」

そうだったのか……ゲームは難しいなあ。

「ってかあんた、川はどうしたのよ？ せっかく川の向こうに熱帯雨林エリアが開放されてるつのに、山じゃなくってそっち行きなさいよ」

話題を変えるように、レイラがそう捲まくし立ててきた。

「そうは言ってもなあ」

以前、東の川のボスを倒し、その先に新たなエリアが開放された。だが、川を隔てたそこに向かうための船がない時点で、状況は詰んだと言っても過言ではなかった。第一、

「筏いかだを作って乗り込んだ連中が魚の餌になってただろ」

「……確かにそうね」

適当な船では、対岸付近に出没するピラニアによく似た魔物【キバウオ】を凌しのげない。丸太

をロープで縛って作った筏は、速攻でロープを食いちぎられ崩壊。乗っていたプレイヤー諸君はあつという間にキバウオの餌食に。それから誰も川の先を目指そうとしなくなった。

こうしてプレイヤーの第1の拠点ができただけでも十分じゃないか。それに、

「今の俺の目標はバトルゴリラにリベンジすることだ」

もうそれしか考えられない。

「あつそう……ならそれでいいんじゃない……？」

ややげんなりとした表情で、レイラは頬杖をついてコーヒーを口に含んだ。

「そうだローレント、近々運営主体で闘技大会が開かれるのは知ってる？」

ようやく運ばれてきた豚ステーキを食べていると、レイラが興味深い単語を口にした。

「闘技大会？」

「ああ、公式サイトは見てないのね」

詳しく話を聞くと、今まで寡黙を貫いていた運営が、プレイヤー増加に伴って他のVRゲームとタイアップしたイベントを開くとのこと。

「もぐもぐ、興味深い、もぐもぐ」

「タイアップするゲームや闘技大会の説明はまだだけど、それに合わせてNPCの集客も行う

みたいだから、いろいろと稼げるチャンスだと思うの。だから素材を……」  
「もぐもぐもぐもぐ、もぐもぐもぐもぐ……ん、話は聞いているから続けて」

「いや、こつちが気になるから、食べ終わってからでいいわよ。って言うか、テーブルに置きっぱなしのグロいの片付けなさいよ。よく食べれるわね、脳みそとか目の前にあるのに」

「慣れてるからな、別に気にならんぞ」

「あたしが気になるって言うてんの！ コーヒーが不味くなるわ！」

「だったら素材を買い取ってほしいんだが」

そう言うと、レイラは顔を苦くさせていた。

「錬金術スキルを持つてる人が知り合いにいないから、買い取りは難しいわねえ……」

「だったら取れば……」

「あんたが取りなさいよ！」

姉御に怒られてしまった。生産活動によって得られるスキルポイントは、手広く複数の生産スキルを取得すると逆に効率が悪くなる。だから生産職は、基本的に1つを扱うのがこのゲームのセオリーなのだ。

「あんたこそ、川に行かないならちよūd良いじゃないのよ」

「生産スキルを上げるほど時間に余裕があるかといえは、そうじゃないからなあ」

大義があるのだ、バトルゴリラにリベンジするという名の大義が。

「——錬金術なら、この私にお任せあれっ！」

「え？」

誰かが急に会話に割り込んできた。声のした方へ視線を向けると、真っ黒なローブとトンガリ帽子を身につけ、魔法職用の杖を抱えた黒髪の少女が立っていた。

「サービス開始第2陣勢の1番槍……じゃなかった杖！ 名はツクヨイと申す。闇の魔法使いであり、さらに怪しげな錬金術も使うぶらつくふれいやあとは拙者のこと！」

「は？」

ローブを翻しながら、自分の片目を手で覆う少女に、俺とレイラは呆気に取られてしまっていた。どうやら、思っていることはだいたい同じらしい。なんだこの女の子は。

「ま、まあ良かったじゃないローレント。やっとお目当ての錬金術師が見つかったわね……ちよっとキャラが濃いかもしれないけど……」

「お、おう……」

やや口元をヒクつかせながらそう言うレイラに、俺は頷くことしかできなかった。

「どうしたんですか？」

そこへ、注文がなくて暇なのか、サイゼがやってくる。

「錬金術師が見つかったのよ」

「おお、良かったですね、ローレントさん！ 私は絶対いやでしたけど」

テーブルの上に置かれた猿の脳やらゴブリンの髑髏、その他諸々のグロテスクな錬金素材たちを見ながら、サイズは断言した。

「確かにグロイラインナップだけど、魚を捌く時だつてあるでしょサイズ？」

「それとこれとは別なんですっ！」

レイラの中では、調理のついでにサイズに錬金スキルを取らせるつもりだったのだろうか。確かにグロ耐性がなければあまり扱えない素材たちではあるし、サイズもその辺では変に物怖じしない性格だから適任であつたかもしれない。断固拒否してるけど。

「おお……これは、へげいぐですね……」

ツクヨイと名乗つた少女の方へ目を向けると、なぜかこの子も表情を硬くしていた。

「取りあえず錬金加工代は払うから、コレをよろしく頼む」

「えっ……？ いや、そのお……」

「なんだ？ 錬金術師でお任せあれつて大見得切つたのは自分じゃないのか？」

泳ぐ彼女の視線をじっと見つめて返答を待っていると、

「その、すいません。嘘こきました。本当はまだゲーム始めたばかりで、エナジーボールし

かスキル持っていないです……レベルも1なんで……」

——素直に思った。こいつ何しに来た。

「あんた……何しに来たの？」

俺でもさすがに言えなかった一言を、レイラがそのままズバツと口に出していた。さすがレイラ、我がが生産組の姐御。そこに痺しびれる懂しれる。

「いやその、興味があつたのは本当なんです……まさかこんなにグロイとは……」  
ツクヨイもやっぱり錬金術スキルは取らない方向でいこうとしているみたいだったが、そこはレイラが許さなかった。

「ちよūdいじゃない？ 今錬金術プレイヤーなんて1次産業プレイヤー並みに人手不足なんだから、ここいらで先取りしておくとか後々楽になるわよ？」

「すいません、勘弁してください」

「遠慮しなくていいのよ。むしろ私が特別に素材の買い取り窓口も引き受けてあげるから、今からスキル取りに行きましょう？ 至れり尽くせりでラッキーね！」

「ごごごめんなさいいいいい!! いやです!! か、勘弁してください!!」

俺とレイラの前であれだけ大見得を切った手前、今更やっぱりやめときますなんて、レイラには通用しない。半ば強引に、青い顔をして嫌がるツクヨイを掴み、レイラはそのままサイゼ

ミアンのテラス席から飛び出して、テンバータウンの方へと走り去って行った。

「な、なんだったんでしょか……?」

話が読めずに啞然とするサイゼ。

「さあ……? まあ取りあえず俺はそろそろ行くから、お会計を」

俺もローヴォも腹が膨れたことだしな。

「あ、はい。1万7000グロウです」

「……高くないか?」

豚ステーキ10人前とローヴォの分でも、7000グロウくらいにしかならないと思うのだが。

「レイラさんから、代金は全部ローレントさんにつてメッセージが届いてます。桁が大きいのは、ローレントさんが来る前にいらっしやった生産組の皆さんの分も入ってるからですね」

……マジか。あいつ、支払い押し付けて逃げやがった。

「ツケじゃダメかな……?」

「最近皆さんツケが多くて、その辺をミアンちゃんとニシトモさんからキツチりしろってお叱りを受けたばっかりなのでダメです」

「………分かった」

くそっ、死んだばっかりで資金が大きく目減りしているというのに、まさかこんなところで

散財してしまおうとは思わなかった。本当に今日はツイてない。まあそんな日もあるか。



…昨日は思わぬ出費によって、昼過ぎからの時間帯を生産活動のみに費やしてしまった。骨折はデスペナルティで治っていたが、HPとMPが10分の1になっているので迂闊うかつに狩りには出られず、残された金策は棧橋でじつと釣りを続けるしかなかった。

幸い食材に関しては、買い取りルートがしっかり構築されていて、鶏肉豚肉ウサギ肉ばかりで飽きたプレイヤーに人気があるので、そこそこの値段で買い取ってもらえる。だが、俺がやりたいのは釣りではなく、狩り、戦い、レベル上げだ。

さて、デスペナルティは24時間経てば元に戻る。今日はゲーム時間で朝からインして魚を釣って金策しつつ、その時たまたま耳にした西の草原へと足を運んでみることにした。

テンバータウンから西はグリーンラビットがいる草原。その先にブリアンたちの農業プレイヤーが麦やら野菜やらを作る農地。さらに、その先の平原エリアが新たに開放されたらしい。

「んだ？ ローレントさ、いったいどうしただべ？」

グリーンラビットを蹴散らしながら農地へ向かうと、農作業用のピッチフォークを持ったブ

リアンがいた。相変わらず目立つ図体をしている。2m超えはすごいです。

「農地の先に平原があるらしいからな」

「んだあ。農地自体、ある程度信用度があるプレイヤーしかこれねえけんども、ローレントさだったらばいけんべいけんべ」

相変わらず訛りがひどいが、話している内容はなんとなく伝わった。確か農地は信用度50以上じゃないと入れないらしい。その先にある平原も、自ずと農地に入れるプレイヤーじゃないと行けないので、プレイヤーも少なく絶好の狩場であるというのだ。

プレイヤーバッシング以降、南の森が人気すぎて、山を目指さない限り、狩りや採取に行ってもあまり収穫がない。リベンジの時まで、西に狩りの拠点を移してもいいだろう。

「そうだ。これ、魚のアラ」

「おおお！ ローレントさ、毎度毎度申し訳ねえだよ！」

魚を捌いた後に残るいらぬ部分は、農業スキルによって肥料にできるから、こうしてリアンに持って行ってあげると喜んでくれる。

「これ、少ないけんども！」

バケツにたくさん入ったアラを渡すと、リアンは代価を支払ってくれた。

「いいのか？」

「ええってええって！ おかげでおらたち農業プレイヤーは助かつとるんだべさ！」

普通は廃棄する物だから無価値なんだけど、金欠である今はありがたく貰っておく。

「ローレントさ、これから西の平原に行くんだべか？」

「うん」

「死んだ話は聞いてるだ。あんまり無理さするんでねえぞ？」

ゴツイ手で握手され、そんなエールを送られた。単純に強敵相手に迂闊なことをして死に戻ったってだけなのに、噂が広まるの早すぎじゃないだろうか。噂話といえど蛇足になるが、ブリアンってリアル農家の娘さんで、実は相当な美人さんらしい。豪快な図体からはとてもじゃないが想像しがたいよな……。

「テンバータウンの農家の人が、平原の魔物さんとがすれば、前みたいに家畜さ放して放牧できるようになるって言ってただよ。頼むべや！」

ブリアンと別れた俺は、ローヴォを連れて農地の先へと足を伸ばした。

【ステップカイト】Lv8

平原の空を縄張りにする鳶とび。臆病で、隙をついて襲うのが常套手段。

平原で出会った魔物は、鷹ではなく鳶の魔物。ピーヒョロロロロという鳴き声とともに俺とローヴォの上をぐるぐると付け狙うように旋回し、ローヴォに向かって急降下。

「グルルル、グオン！」

ローヴォは唸り声を上げながら問題なく迎撃。上から襲いかかるステップカイトをギリギリで躲し、翼を前足で抑え込むと、動けなくなった敵の喉元をひと噛み。

「グエツ」

そんな断末魔を上げる仲間を上空から見ているステップカイトたちは、説明書きにあった臆病性そのまま、全く近寄って来なくなった。さてドロップはどうだ？

【平原鳶の羽】矢羽に用いると滞空補正がかかり、飛距離が上がる。

【草原鳶の嘴】硬く鋭い嘴。鍬として使えば滞空補正がかかり、飛距離が上がる。

なかなか有用な素材が手に入った。弓使いのプレイヤー人口は戦士の次に多いと言われているため、消耗品である矢の素材は買い手がつきやすい。

ビビって近寄って来なくなった鳶共は無視して、平原をどんどん進んで行く。平地だけあってポップするモンスターが分かりやすく、森と比べて狩りやすいと感じた。

【ドッグプレーリー・オス】Lv 13

平原に住む大きなリス。猫のような鳴き声で鳴く。大人しく、家族を大事にする。

【ドッグプレーリー・メス】Lv 12

平原に住む大きなリス。猫のような鳴き声で鳴く。大人しく、家族を大事にする。

猫のような鳴き声で鳴くリス科の魔物。だがその容姿は、見るからに大きなカピバラのような可愛らしい姿で、何一つ説明書きが被っていないツツコミ待ちの魔物だった。

「にゃあにゃあ」「にゃあにゃあ」

本当に猫みたいな鳴き声で鳴いていて、ローヴォも口を開けて黙って見つめている。オスとメスで番になり、穴を掘って作った巣に家族で住んでいるようで、とてもじゃないが狩る気になれなかった。

家族団欒をほんわかした気持ちで見守っていると、俺とローヴォを敬遠していたステップカイトが、ドッグプレーリーの子供を標的と見定めていた。

「ピーヒョロロロロ！」

鳴き声と共に急降下。動きのトロいドッグプレーリーの隙をついて子供を攫う。

「にゃあああああ！」

助けを呼ぶドッグプレーリーの子供。どうするドッグプレーリー、家族を守れるか。

固唾を飲んで見守っていると、オスのドッグプレーリーが空に向かって鳴き声を上げた。

「にゃあああああッツツ!!」

その瞬間、俺は自分の目を疑った。鳴き声と共にドッグプレーリーの体がおおよそ2倍ほどの大きさに膨れ上がったからだ。筋骨隆々になったドッグプレーリーは、我が子を攫ったステツプカイトに狙いを定めて大跳躍する。

「グルアアアッ！」

「ピ、ピーーヒヨロロロツツ!?!」

焦って羽ばたくステツプカイトだが、跳躍したドッグプレーリーの方が速い。体当たりして子供を奪い返すと、回転しながら綺麗に着地。その頃にはシユ〜と縮むように元の愛くるしい姿に戻っていた。……なんだこのモンスター。

勇ましい姿も見たことだし、取りあえず狩ってみようと【エナジーボール】を撃ち込んでみる。すると直撃したメスは、そのまま弾けて死んでしまった。

「何なんだ、マジで何なんだこいつ」

辟易しながら、残った敵にローヴォを嚇ける。

「キャンキャンキャン！」

「グルルルアアア！」

どうやら近づくと体を巨大化させて襲いかかってくるようだ。番いを殺された怒りのままに、猛烈に追い立てるオス。あまりの迫力にローヴォは必死の形相で逃げ回っていた。

「グルアアアア……アアア、にゃあああ」

巨大化は長くは持たないようで、追いかけてこをしているうちにドッグプレーリーのオスは煙とともに再び元のサイズに戻り、可愛らしい鳴き声を上げる。

「……………グオンッツ!!」

立場が逆転。若干うんざりした表情をしながら、ローヴォはドッグプレーリーを一撃で噛み殺した。イラっとしたら人並みに八つ当たりする灰色狼である。

【団戀栗鼠の齧歯】 巨大な前歯。研げば刃物として使うことができる。

【団戀栗鼠の尻尾】 良い肌触りをしているので、首に巻くと気持ち良い。

【肥大化した肝臓】 錬金術に用いられる。

【糞】 肥料に使える。

ドロップアイテムはこんな感じ。一家団欒を蹴散らせば、ドッグプレーリーの巣ごとアイテムを回収できるようだった。肝臓とか相変わらず錬金素材はグロイ代物ばかりだが、これにあの巨大化の秘密が隠されているのだろうか。そして、農地の隣にあるこの平原で肥料となるドロップアイテムはかなり相性が良く、稼ぎの手段になるかもしれない。

こうしてドロップアイテムと狩やすさを考えると、平原もなかなかいい狩場だと思った。ただ惜しむらくは、見渡す限りの平原で、南の森ほど魔物が湧いてないところかな。

「でもあれか、ここの魔物は弱いな。手応えがない」

バトルゴリラを倒すためには、もう少し手強い相手と戦わないと話にならない。つてことで俺とローヴォは、ドッグプレーリー狩りもソコソコに、西の平原をさらに奥まで進んでみることにしたのだった。

そして遭遇する。平原に悠々と存在する大量の牛たちに――。

【ウエストバイソン】Lv19

平原に生息する野牛。温厚だが、一度怒ると手をつけられない。群れで行動する。

ドッグプレーターとステップカイトが出現するエリアからさらに先へ進むと、平原を分断するような崖が存在する。5mほどの崖から平原を見渡すと、10頭以上の野牛の群れがいくつも点在していた。レベルはどの牛もレベル16〜20の間で、いざロープを使って崖を降りてみると、その大きさがよく分かった。

確か、アメリカバイソンの成体って600kgくらいあるんだっけな。うん、そのくらいあります。下手すればそれ以上の体格。短いが尖った角を持っていて、あれで貫かれればひとまわりもないだろうなあ。

……ゾクゾクする。バトルゴリラとどっちが危険なのだろうか。単純に個体値で言うところ、霊長類に軍配が上がりそうな気もするが、大きく群れを形成している分、ウェストバイソンの方が圧倒的に思えた。

「取りあえず一度上に登って考えるか」

近づいても、こちらから攻撃を仕掛けないと襲ってこない様子なので、一度戦法を考えるためにローヴォを背負って崖を登った。すると、

「ん？　なんだお前、いたのか」

目の前にトモガラが立っていた。そして他にも誰かいる様子。

「おお、ローレント。久しぶりだな」

「珍しいところで会うもんだ。たまには石工所に顔出せよな、ガハハ！」

「装備のメンテナンスでたまに会うのであるが、フィールドでは初めてであるな」

トモガラの他に、ミツバシ、イシマル、ガストンの生産組のメンツが揃っていた。確かにガストンの言う通り、珍しい顔ぶれだ。会うのはいつだって工房で、こうしてフィールドで顔を合わせたのは開放前の東の川くらいである。

「どうしてここに？」

尋ねるとトモガラが明快に答えてくれた。

「何って？ 見ろよ、見渡す限りの牛共だ。目的つつたらアレしかねえよ」

「牛肉だ、ガハハハ！ 鶏にも豚にも飽きたからな。やっぱバーベキューは豪快にステーキを焦げるまで焼くのが男のロマンじゃねえか！ ガハハハッ！」

ガストンも豪快に笑うイシマルの意見に頷いていた。だが、ミツバシは少し不安そうに頬を掻きながら崖下を眺めている。

「でもよお……聞いた話によれば、1頭攻撃すると群れ単位で報復に来るんだろ……？」

「そうなのか？」

「先に西の平原に向かったプレイヤーが言ってたぞ？ 遊び半分で攻撃すると、津波みたいに押し寄せて来てトラウマ刻まれるって……」

そう言いながらミツバシはぶるつと体を震わせていた。

「ハア、情けねえな。なら拠点戻つて黙つて魚食つてろ！ 肉は渡さねえ」

ため息と一緒にトモガラはそう言いながら街の方を指し示す。

「なっ、トモガラひでえよ！ 俺だつて牛ステーキ食べたいんだ！」

「なら、働かざるもの食うべかざるであるな」

「おうよ。ミツバシ、男見せろつて！ ガハハハッ！」

「ちくしょーっ！ いいよ、分かったよ！ やつてやるよ！」

煽られたミツバシは、震える体に鞭を打つようにして己を奮起させると、そのままお手製のクロスボウガンを手には崖を降りようとする。

「ちょっと待てミツバシ。それは死に行くようなもんだぞ」

さすがに1人で行くのは無謀だから、彼の首根っこを掴んで崖の上に戻す。

「どわっ！ 何するんだよ、ローレント！ だったらどうすんだよ！ 目の前に大量の牛肉があるつてのに、俺らはここで指くわえて見ることしかできないのか!？」

なんか錯乱しているな。まったく、ビビりだつて知つてて無駄に煽るからいけないんだ。喧嘩を知らない奴が手加減できないでやり過ぎてしまうのと一緒だぞ。

「取りあえず見ててくれ」

正氣に戻ったミツバシが、恥ずかしさのあまり後ろで体操座りして落ち込む姿を尻目に、俺は腰につけている投鉛なげなを牛に投げ、さらに手元にもう一本引き寄せると連投する。

「ん？ おいローレント、その鉛どっから出したんだ？」

アイテムボックスを経由せずに鉛を出したからか、トモガラが目ざとく気付いていた。

「スキルパラメーターマックスボーナスだ」

「ああ、なるほど」

納得するトモガラに教えておく。はぐれガノイフィッシュ・ベビーを倒して南の森を中心に狩りを行っていた頃、ようやくアポートのスキルパラメーターを全てマックスまで育てることができたのだ。

【アポート】物体を手元に引き寄せる魔法スキル。

- ・ 精度 Lv 10 / 10
- ・ 距離 Lv 10 / 10
- ・ 重量 Lv 10 / 10
- ・ 詠唱 Lv 1 / 1

全てを振り終えた後、こんなインフォメーションメッセージが届く。

《魔法スキル【アポート】がレベルマックスになりました》

《スキルマックスボーナスが開放されます》

なんと、スキルパラメーターを全て育て切ると、マックスボーナスといって、スキルの威力、利便性が大きく上昇するという。ボーナスがついたアポートの表記はこうだ。

【アポート (MAX)】物体を手元に引き寄せる魔法スキル。

- ・ 精度、距離、重量の制限開放。
  - ・ 無詠唱可能。
  - ・ ストレージからセットアイテムの任意転移が可能。
- ※ストレージを設定してください。

今までは距離、重さに制限があつて、軽いもの以外は精度にやや難点があつたものの、制限開放したことによって、目が届く距離ならどんな重さでも抜群の精度を誇るようになった。

さらに特筆すべきは無詠唱。今までは声に出して「アポート」と詠唱しなくてはいけなかったが、これによって、心の中で念じるだけで手元にアイテムを引き寄せることができる。試しに食器を手の上で連続アポートし、くるくると回転させてみた時は感動した。

そして最後の「ストレージ」だが、倉庫として設定した場所に置いてあるアイテムを自分の手元に転移させるスキルである。いちいちアイテムボックスを開かなくても、ステイブンから間借りしている部屋をストレージとして設定し、その部屋にいろいろ武器を置いておけば、覚えている範囲で転移が可能に――。

「――そういうわけで、俺の【アポート】は完璧な便利スキルとして昇華されたのだ」

「……物資運ぶ時に便利だけだよお、戦闘で使えるのかそれ？」

俺の長い説明をヤンキー座りで頬杖ついて聞いていたトモガラがそんなことを聞く。甘いな、無詠唱になったことで戦術の幅は大きく増したのだ。

「ちょ、おい！ ローレント！ どどど、どうするんだよ！ 牛たち怒ってめっちゃ突撃して来てるって。ヤバイってこれ、ヤバイってえええええ！」

「うるさいなあ。崖があるから登ってこれない。安心してくれ」

「そ、それでもよお……」

大群をもつて崖下に押し寄せて威嚇するウェストバイソンにビビるミツバシ。これにはロー

ヴォも呆れた顔を隠せないようだ。

「遠距離武器持つてるんだから、牛を弱らせるの手伝ってくれ」

「お、おう」

ガチムチ近距離3人衆は取りあえず放置して、俺とミツバシは眼下に犇めく牛たちに、クロスポウを射たり銛を投げ込んだりと、どんどん攻撃を当てて行く。

「なんか、すごい光景であるな」

牛たちのヘイトが波及し、ものすごい数が崖下に溜まり、逆に動けなくなった。

「すげえなこりゃ。つてか漁師、こんな状況にしてどう収拾つけるんだ？」

豪快な男、イシマルもさすがにこの状況には顔を引きつらせる。

俺はロープを取り出すと、そのままカウボーイよろしく牛の首めがけて投げる。そしてうまく引っかかったところで、イシマルに手渡した。

「屈強な男が揃っているんだ。あとは任せたぞ、ほら」

「はあっ!? ほら、じゃねえ——うおおおああああ!!」

ロープを受け取ったイシマルは、牛に引きずられるようにして崖下に落ちそうになる。

「チッ、ハイブースト、マッシブ! ——重てえな石工さんよおッ。少しはダイエツトした方がいいんじゃないか?」

身体強化スキルを使ったトモガラが、崖から転落するイシマルを間一髪で掴んだ。

「んなこと言われても、急すぎんだよクソ漁師が！ あと石工にダイエツトもクソもねえ。重たい石を運んで削って毎日鍛えたこの剛体を舐めんなよ！ ブースト、マッシブ！」

なんとか復帰したイシマルは、トモガラと一緒にロープを引っ張り始めた。さすがのウエストバイソンもこの2人との綱引きは分が悪いようで、ズルズルと引き寄せられていく。

「我輩もロープをもう一つ用意して加勢するである。ブースト、マッシブ」

「ほらミツバシ、サボってないで足を狙え」

「お、おう。分かったぜローレント。足だな？ 足を狙えばいいんだな？」

綱引きする3人を援護するべく、俺とミツバシは牛を弱らせにかかる。っていうか、ガチムチ3人衆がみんな【マッシブ】持ちだつてことに驚きを隠せない。身体強化スキルの中でも、全身ではなく腕力を上昇させるスキルらしいが、こいつらに必要なのか？

——いやガチムチ故に、そのスキルを選んでしまったのだろうか……。

「おいこらローレント！ ほさつとしてねえで、次どーすんだよ！」

余計なもの思いに耽<sup>ふけ</sup>っていると、顔中に血管を浮き上がらせピクピクとするトモガラが次の指示を仰いできた。

「そのまま崖の上に釣り上げるぞ！ あと少しだ！」

崖の下に降りることは則ち自殺を意味する。だからこうするしか方法はないとみた。

「はあ!? 石工そろそろ腕がピクピクしてきたぜ！」

「何言ってるんだてめえ。こちらら木樵はさつき1人で牛とデブを支えてんだよ！」

「ううむ、乗りかかった船、しのごの言わずにやるのであるぞ！」

——うおおおお！ と3人は最後の力を振り絞って牛を崖の上へと引き上げ始めた。

「思ったんだけどさ、漁師ならぬ猟師とかいないのかな？」

「き、急になにを言い出すのであるか、ミツバシ？」

「いや、側から見ててさ、ドロップ化するより1頭丸々解体できる猟師がいた方が、苦勞して手に入れた牛肉を余すことなくありつけるんじゃないかなってね？」

た、確かにそうだ。一瞬時が止まって俺たち4人の脳裏に激震が走る。だが、しのごの言ってる場合じゃない。

「ってか、そんなこと言ってる前にミツバシこら、引き上げるの手伝えよ！」

「ぐわー！ 暴れるな！ 石工そろそろ腕の筋肉がピキピキいつてきたぞー！」

「ローレント！ 暴れる牛をなんとかできないであるか!？」

「分かった」

凶体が宙に浮き始めて、ウェストバイソンは身を悶えさせて暴れ始めた。小さめの個体を選



んだとはいえ、それでも体重は600kg超。ジタバタするだけでもかなりの抵抗力だ。

少し余計な重さが加わってしまうが、背に腹はかえられない。俺は武器を貫きのレイピアに持ち替え、崖下に垂らしたロープを掴むとそのまま下に降りた。勢いをつけて、牛の横腹から心臓に向かって肋を通すようにレイピアを突き刺した。

「——ブ、ブルッ——」

既にある程度体力を減らしていた分、心臓を貫かれた牛は1度痙攣するとすぐに動かなくなつた。よし、あとは引き上げて解体するだけだな。

「苦勞させやがって、この牛公が！」

引き上げられた牛の死骸をトモガラが悪態をつきながら蹴飛ばした。

これが時間経過で消えてしまう前に、俺たちは解体スキルを使うか、誰かが猟師スキルを取得して素材のままにしておくか選ばなければいけない。

「やっぱりもつたいないよなあ」

正直、肉をドロップするとは限らないのだが、指を咥えてもつたいないと言うミツバシ然り、みんなこのウエストバイソンが牛肉をドロップすると信じて疑わない様子だ。

「解体スキルだとだいたいどのくらい肉が取れるんだ？ ガハハ、早く食べたいぞ！」

「うーん、オークとか解体スキルで豚肉2枚く5枚だから、それ以上だとは思わが……」  
ミツバシ、イシマル、トモガラの3人が声を揃えて言う。

『――少なすぎる、もったいない』

そんな彼らに、ガストンが言つてはならん一言を言い放つた。

「ならさつさと獵師スキルを取るである。メッセージが出ているが無視していたのであろうか？」  
生産の獵師スキルは通常の魔物では出現しない。弓矢を使って狩獵対象の魔物を倒すことによつて取得可能となる生産スキルだ。ちなみに、グループメンバーに弓を扱うプレイヤーがいると、同じ魔物を倒した時も、スキル取得のトリガーが解放される。

……この場合、ミツバシがクロスボウを持っていた。

ウエストバイソンを倒した際、実は獵師スキル取得のインフォメーションメッセージが出たのだが無視していた。俺と同じようにみんな口に出さないつてことは、そういうことなのだろ。

「おまえやれよ。漁師も獵師も変わんねえよ」

トモガラが俺にキラパス。……こいつ。

「だったら木樵と獵師でマタギになればいいだろ」

イメージ的には一番似合っている気がするしな。あとは髭ひげが獵師っぽいイシマル？

「……いや俺、石工だし」

「俺は木樵だ」「鍛冶師である」「漁師だ」「石工!」「木樵!」

そんなリレーを経て、最終的にミツバシへとみんなの視線が向かう。

「いや俺、既に細工師と漁師で2つ持ってたんだけど」

「2つも3つも変わんねえから、取りあえずいっとこうぜ! な?」

サムズアップするトモガラに、ミツバシが立ち上がって言い返す。

「いやいやいや! 俺、ローレントがいない時とか作業の合間に釣りとかして、頑張ってるんで魚の供給とかしてるんだけど、川辺の拠点の管理とかもあるからさ! そうだよ、ローレントだよローレント! 川に來ないならいっそ獵師に——」

「——解体!」

危ないところだった。俺に飛び火して、危うく獵師スキルを取らされるところだった。毎回毎回魔物倒して解体するのとか正直面倒だからな。うむ、これでよかったのだ。

『あああああああー……ッッッ!!』

平原にドロップしたアイテムを前にして、ガチムチ2人とヒョロイおっさんの叫び声が西の平原に響き渡った——。

tera  
イラスト 山椒魚

# グロウイング・スキル！ オンライン2

Growing Skill  
Online 2

試し読みはここまで  
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

[http://books.tugikuru.jp/detail\\_gso.html](http://books.tugikuru.jp/detail_gso.html)